

清流の住人「カワシンジュガイ」を知っていますか？

カワシンジュガイは、幼生(グロキディウム)期に、ヤマメのえらに2 ヶ月間ほど寄生し、その後、河床に着底して成長を始めるという独特の生活史をもつ淡水2枚貝です。この貝は全国的に激減しており、環境省のレッドデータブックでは、絶滅危惧Ⅱ類に、また分布報告のある15都道府県のうち7割が絶滅危惧もしくは準絶滅種に指定しています。林業試験場では、これまでヤマメの生息環境と河畔林の関係について研究を行ってきましたが、こうした知見を活かし、カワシンジュガイの生息環境について調査を始めました。道内での生息状況については断片的な資料しかないため、全道各地でアンケート調査を実施するなど実態把握を行っています。

現在までに合計30回の調査で500名を超える回答を得ましたが、道央圏、道東圏、オホーツク・道北圏からの目撃情報が多く寄せられています。また目撃した年代には地域差が見られ、道央・十勝圏域では8割近くが昭和20～50年代以前の日撃情報であるのに対し、道東・道北圏域では半数前後の回答者から「現在もよく見る」という情報が寄せられています(図)。

こうした調査を踏まえ、環境の変化がカワシンジュガイの生息に与える影響についてさらに研究を進め、身近な川の保全・再生に活かしていきたいと考えています。

(企画課、流域保全科)



写真1. 道内某河川におけるカワシンジュガイ。



写真2. 河床における着底状況。

図. 圏域別に見たカワシンジュガイの日撃年代の内訳。

グラフ内の数字は回答者数を示す。色が濃いほど目撃年代が古く、薄いほど情報が新しい。

←濃い色の割合が多いほど、目撃年代が古い
薄いほど情報が新しい→

